

福山大学薬学部・福山市薬剤師会 シリーズ研修会

講師：江藤 精二 先生（福山大学薬学部薬剤情報解析学 教授）

テーマ：「分子標的抗がん剤」（全3回）

分子標的抗がん剤（以下、分子標的薬）の上市が相次いでいるが、治療法の選択肢の幅が広がるとともに、これまで有効な治療薬がなかったがん患者に福音をもたらしている。一方、選択肢の増大は適切な選択のための検査が必要になるなど、治療薬決定までの過程が複雑化し、医療費の増大などの問題点を招いている。今回のシリーズ研修会では、臨床で使用されている分子標的薬の作用部位・機序を概説し、これまでの成果と今後の課題についてお話しします。

第1回 7月4日（火） 「分子標的抗がん剤：作用部位と作用機序」

分子標的薬の分類としては、膜受容体や膜上分化抗原などの作用部位、EGFRなどの標的分子、あるいは免疫チェックポイント阻害などの作用機序に基づいて分類されます。既に臨床で使用されている分子標的薬、また現在開発中の分子標的薬を紹介しながら、その作用部位や作用機序について解説いたします。

第2回 7月11日（火） 「分子標的抗がん剤：効果の違いの原因は」

悪性腫瘍の中でも慢性骨髄性白血病は、イマチニブやダサチニブなどの登場により治癒可能な疾患となりました。トラスツズマブやリツキシマブもがん治療に劇的な変化をもたらしました。一方、ベバシズマブなどの血管内皮増殖阻害薬など、一定の効果はあるものの欧米と日本ではその評価に温度差があるものもあります。今回は、分子標的薬の効果の違いについて解説いたします。

第3回 8月1日（火） 「分子標的抗がん剤：なぜ効かなくなるのか」

分子標的薬は遅かれ早かれ耐性が生じます。耐性化した場合の対応は大きな課題の一つです。耐性の原因は様々ですが、遺伝子変異が重要な原因の一つとされています。今回は、耐性化のメカニズムと耐性化した癌に対する治療薬の開発の方向性と課題について解説いたします。

会場：福山大学宮地茂記念館402研修室 時間：19時30分～21時00分

連絡先：（一社）福山市薬剤師会 TEL: 084-926-0588 FAX: 084-924-7839 E-mail: fpa@fukuyamashiyaku.org

福山大学薬学部 TEL: 084-936-2111 FAX: 084-936-2024 E-mail: tamura@fupharm.fukuyama-u.ac.jp